

## # 「結婚の提案」 妖怪「横文字」登場

先生が、依頼人を連れて来た。

OLの子で、その彼氏が様子がおかしいのだという。急に、「日本語と英語が混ざったような会話」になったのだと。

シンイチは現場へ。サラリーマンの彼氏には、妖怪「横文字」が取り憑いていた。

そもそもこれは、外人上司がやって来た所からはじまっていた。彼氏は、ときに日本語ときに英語でしゃべるようになり、帰国子女のように、両方の言語が入り混じってしまっていた。「オーソライズされたこのアジェンダは、全体のスキームを更新するわけです。とりあえずバッファにおいとして、コンプライアンスのマトターを…」

日本人からは「日本語で言えよ！」 外人からは「英語できちんと話せ！」という状況になり、自分でも混乱したままなのだ。俺は、一体誰なんだ？と。

英語と日本語を分離する、彼女のOLとシンイチの奮闘。和製英語ネタとか、和製ロックの歌詞とか、脚韻も踏んでないJラップとか？ 結局、「日本語をカッコ悪いと思ってる」のではないかと、シンイチは推理する。

そんなとき、彼氏の実家の父が倒れたと。

田舎に帰る彼。「仕事はどうだ？」と聞かれ、英語日本語入り混じった説明をする彼。しかし話は通じない。彼は「本当は…もう駄目かも知れない」と、はじめて本当のことを言う。「カッコつけたいだけだった」と、本音を言った瞬間、妖怪は外れる。

父の手術は無事成功、一件落着。

一月後。彼は、彼女にプロポーズしようと指輪を持って来た。英語を使っちゃいけないというプレッシャーからか、「プロポー…いや、えっと、あの……」「？」「結婚、提案」と思わず言ってしまう彼。しまったと顔をしかめる。彼女は指輪をうけとり、「合点承知」とほほえんだ。